横浜市立 一本松小学校　　学校評価報告書　　（ 令和 4 ～ 6 年度 ）

重点取組分野	令和 4 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
生きてはたらく知	・自分の考えを分かりやすく伝えたり、友達の意見を聞いて考えを深めたりする場をもつ。 ・ICT機器を活用することなどの取組を通して、自ら学習に取り組む姿勢を育む。 ・物事を多面的にとらえたり論理的に説明したりする力を養う。	・根拠を基に自分の考えを友達に説明することを大切にできてきた。 ・ICT機器を使って考えの説明・共有・振り返りを行う場面を設定し、活用してきた。効果的な活用とできているか今後も検討が必要である。 ・考えを伝えることに成果が表れてきた。今後は、話合いをつなげる力、探究する力を伸ばしていきたい。	B
豊かな心	・体験的な学習、異学年交流による活動等を充実させながら、自分づくりパスポートで活動の振り返りを行う。 ・課題発問振り返りのプロセスを大切にして、道徳の授業力向上を目指し、道徳の授業の充実を図る。	・感染症予防の観点から、最小限の回数で実施した。異学年交流については、不十分であったと感じる。自分づくりパスポートでの振り返りを行うことができた。 ・重点研究で道徳の授業力向上を目指して研究が進められた。	B
健やかな体	・運動することの楽しさや喜びを実感できるよう、オリンピック・パラリンピック教育などを行う。 ・運動に取り組む機会や時間を確保し、体力の維持・増進を行う。 ・学校保健委員会を中心に心や体の健康についての取組を行う。	パラリンピックの競技を体験を行うことで、運動することの楽しさや喜びを味わうことができるようにした。 コロナ禍もあり、制限が多く体力向上の取り組みを行うことができなかった。 学校保健委員会では、『健康のために、自分にできること』をテーマに、よい生活習慣について考える機会を設けた。	C
公共心と社会参画	・日々の学習の中で、身近な他者との関わりを通して、自分の考えを伝える場面を意図的につくる。 ・自分の考えをさらに練り上げていく活動を取り入れ、自信をもち、表現できるようにする。	・学習交流会で自分たちの学びを他学年に向けて発表する機会を通して、自分の思いや考えを伝えたり、協働的に課題解決したりする力を養うことができた。また、活動制限が少しずつ緩和され、体験活動の機会が増えたことも、身の回りの環境に目を向けるきっかけとなった。	B
いじめへの対応	・いじめ防止対策委員会で、広く情報を共有し、未然防止に努める。職員がいじめ防止基本方針を正確に把握しておけるようにする。 ・教師が迅速に、適切に対応ができるように実践的な研修の充実を図る。いじめをキャッチしたとき、すぐに必要な連携ができる環境づくりを行う。	・こまめに点検を行った。会議を重ねるごとに、対応についても具体的に話ができるようになってきた。来年度もさらに充実した組織作りをしたい。 ・些細な出来事であっても会議に挙げて話し合いができるようになり、いじめに関する感度がかなり上がってきていると実感している。	B
人材育成・組織運営(働き方)	・経験の浅い教員が自信をもって学習指導に当たることができるよう、学年研の時間をしっかりと確保して教材研究を行うことができるようにする。 ・会議を精選し、軽重を付けることで、学校の組織として、一人ひとりが自分の役割を果たすことができるようにする。	・学年研、メンター研、重点研究、夏季研修などを通して、経験の浅い教員も機会と見通しと自信をもち、学習指導をはじめ教育活動にあたることができた。 ・定期的に教務会を設定し、課題を検討し、情報を全体でも共有することができた。 ・時間の確保と見通しにつながるような会議や取組を設定し、より質の高い学びを目指していく。	B
地域連携	・「一本まつり」や「安全の集い」など、地域の方と関わり合い、つながりを感じるとともに、感謝の思いを伝える。 ・生活科や総合的な学習の時間など、地域の人と関わる場面を設定し、自分もまちの一員であると感じ、自らまちに関わろうとすることができる。	・共育倶楽部や自治会の方々などと学習場面で関わったり、お世話になっている地域の人にメッセージカードを書いたりすることを通して、自分たちの学校生活は地域の方々に支えられていることを理解するとともに、自分の成長を感じたり、達成感や充実感を感じたりすることもできた。	B
児童生徒指導	・校内組織の充実を図る。 ・月１回以上、全職員で児童情報共有を行う。 ・YPアンケートの実施、活用、横浜プログラムの活用を図る研修を行う。	・校内の児童理解部で校内の課題にについて共有を図った。課題を解決するために実践を行った。全校の教職員を巻き込んで、実践を行えるよう広く呼びかけ、理解を促すための研修を積極的に行っていく必要があると思った。	B
特別支援教育	・特別支援教室としての機能をもった教室を配置する。 ・個別支援学級と一般学級の児童が明確なねらいのもとに交流や共同学習に取り組む。 ・実践的な研修を行い、特別支援についての知識理解を深め、実践に生かす。	・児童の実態に応じ、一般級の担任と密に連携を取り保護者や本人と相談した上で交流を行った。 ・前期と後期に一回ずつセンター機能を利用し、保土ケ谷養護学校の専門職の方に訪問依頼をし、それぞれの児童の具体的な支援方法を学び、生かした。	B
a15	a25		

ブロック内評価後の気付き	・「かかわり合いの中で主体的に学ぶ子の育成」をテーマに授業研究を進め、目指す子供像を共有することができた。、教育課程再編成にも一定の成果が得られたが、今後も授業力向上を目指し、改善する必要がある。 ・校外活動等、たてわり活動など、体験的活動を取り入れることが可能となった。生活・総合的な学習の時間のみならず、道徳などでも単元開発し、地域の材などを生かす取組を進めることができた。児童のまちへの愛着や思いにもつながった。 ・Zoomでの研究会参加、学校YouTube配信による保護者への説明会、クラスルームでの会議、ロイロノート活用研修、iPadを使った授業展開の工夫等ICT活用が飛躍的に進んだ。 ・対面の交流、実施可の取組が増え、中学校ブロックや区内の情報共有が密になり、横のつながりが強くなってきた。
学校関係者評価	・コロナ禍で制限のある中での3年間で子どもたちの体力が落ちていることが心配であるが、次年度以降感染症対策が緩和された結果、3年間の経過をみて、体力向上の取組の成果と課題を見極めていく必要がある。地域の公園使用の制限もあり、放課後の遊び場の確保も難しくなっているため、放課後の校庭開放などがあってもよい。 ・ICTを活用した授業が進んでいる一方で、情報モラルの指導もしっかりと行っていく必要がある。児童のタブレットの使い方について、いじめにもつながる可能性や様々な点で配慮が必要となるため、事前指導や机間巡視で十分かどうか検討する必要がある。

中期取組目標振り返り	・制限がある中でも、地域のよさや人材を活用した活動を取り入れた授業を積極的に行ったり、道徳の授業研究を通して子どもたちの豊かな心を育むことにつなげたりするなどして、子どもたちの資質・能力の向上に効果をあげた。 ・一本松共育倶楽部の授業のサポートや児童の見守り、学校運営協議会の設置等地域の教育力の高さをいかした学校運営を実現している。 ・職員間で情報を共通理解・確認し、児童の変化にも早期発見と組織的対応につなげていくことができた。今後も地域や保護者と連携し、一人ひとりの自己有用感を高め、より充実した教育活動を模索していきたい。

重点取組分野	令和 5 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
生きてはたらく知	・自分の考えを分かりやすく伝えたり、友達の意見を聞いて考えを深めたりする場をもつ。 ・ICT機器を活用することなどの取組を通して、自ら学習に取り組む姿勢を育む。 ・物事を多面的にとらえたり論理的に説明したりする力を養う。語り合う児童の姿の実現を目指す。	・根拠を基に自分の考えを友達に説明することを大切にできてきた。聞く力には課題が残っている。 ・ICT機器を使って考えの説明・共有・振り返りを行う場面を設定し、活用してきた。文字で書くこととの併用・融合など効果的な活用とできているか今後も検討が必要である。 ・考えを伝えることは成果として表れてきた。今後も、語り合う力を目指して話合いをつなげる力を伸ばしていきたい。	B
豊かな心	・体験的な学習、異学年交流による活動等を充実させながら、自分づくりパスポートで活動の振り返りを行う。 ・問題意識と振り返りの充実を図るべく、カリキュラム・マネジメントを推進し、道徳の授業力向上を目指し、道徳の授業の充実を図る。	・たてわり活動や校外学習など、制限のない中で実施できた。そのため、異年齢交流や体験的活動がコロナ禍より充実できたように感じる。自分づくりパスポートでの振り返りを活用しつつ、来年度もこのような活動を増やしていく。 ・学校全体で道徳の授業に取り組み、授業力向上や授業の充実に尽力できた。しかし、反省の共有や事後活動の充実など、課題点も挙げられた。	B
健やかな体	・運動に取り組む機会や時間を確保し、体力の維持・増進を行う。 ・全校対象の運動機会の設定をする。 ・休み時間のボールの使用を解禁する。	コロナ禍も明け、制限のない体育の授業や休み時間を過ごすことができた。全校を対象とする運動機会の設定として、長縄大会を実施した。ボールの解禁や長縄大会の実施などから、休み時間に校庭で遊ぶ児童が増えた。体力向上に向けた取り組みから、体を楽しく動かす機会を増やすことができた。一本松オリンピックでは、競技数の増加を図ったことで子どもたちの主体性・意欲性も高まり、体を動かす楽しさを実感することができていた。	B
公共心と社会参画	・日々の学習の中で、身近な他者との関わりを通して、自分の考えを伝える場面を意図的につくる。 ・自分の考えをさらに練り上げていく活動を取り入れ、自信をもち、表現できるようにする。	コロナによる活動制限が大きく解禁され、保育園・幼稚園との交流を行うことができた。また、地域の人に野菜の世話をお願いしたり、他学年へ学習したことを発表する等、様々な人との関りをもって自分を表現する機会が増えた。	B
いじめへの対応	・いじめ防止対策委員会で、広く情報を共有し、未然防止に努める。職員がいじめ防止基本方針を正確に把握しておけるようにする。 ・教師が迅速に、適切に対応ができるように実践的な研修の充実を図る。いじめをキャッチしたとき、すぐに必要な連携ができる環境づくりを行う。	・定例会議に加え、臨時的に行われる会議についても体制づくりをしっかりと行い、迅速に対応ができた。 ・アンケ―トが年2回の実施となった。教育相談をアンケートごとに行い、児童のSOSを確実にキャッチできた。また、適切に聞き取りができるよう研修や、専任会等での研修の内容を発信した。	B
人材育成・組織運営(働き方)	・経験の浅い教員が自信をもって学習指導に当たることができるよう、学年研の時間をしっかりと確保して教材研究を行うことができるようにする。 ・会議を精選し、軽重を付けることで、学校の組織として、一人ひとりが自分の役割を果たすことができるようにする。	・学年研、メンター研、重点研究、夏季研修などを通して、経験の浅い教員も機会と見通しと自信をもち、学習指導をはじめ教育活動にあたることができた。 ・時間の確保と見通しにつながるような会議や取組を設定し、各部会で課題を検討し、情報を全体でも共有することができた。今後も、会議を精選しながら、質を維持しつつ、より質の高い学びを目指していく。	B
地域連携	・「一本まつり」や「安全の集い」など、地域の方と関わり合い、つながりを感じるとともに、感謝の思いを伝える。 ・生活科や総合的な学習の時間など、地域の人と関わる場面を設定し、自分もまちの一員であると感じ、自らまちに関わろうとすることができる。	・読み聞かせや学援隊、校外学習の見守りなど、お世話になっている地域の方に感謝のメッセージを送ることを通して、地域の温かさを感じ、感謝の気持ちを育てることにつなげた。 ・一本松の地域の財を活用し、生活科や総合、社会科の学習を行うことで、地域への愛着を高めた。	B
児童生徒指導	・校内組織の充実を図る。 ・月１回以上、全職員で児童情報共有を行う。 ・YPアンケートの実施、活用、横浜プログラムの活用を図る研修を行う。	・各学年やブロックの児童指導部の教員と情報共有を行い、その時々の困り感や課題に迅速に対応できた。 ・YPについては、アンケートの分析や活用についての研修を年間で行った。より充実できるようプログラムの活用を推進したい。	B
特別支援教育	・特別支援教室としての機能をもった教室を配置する。 ・個別支援学級と一般学級の児童が明確なねらいのもとに交流や共同学習に取り組む。 ・実践的な研修を行い、特別支援についての知識理解を深め、実践に生かす。	・学習支援を必要としている児童について特別支援教室の運用が安定して行えるようになった。不登校や情緒面で利用する児童にとっても入りやすい環境作りが課題である。 ・YP分析と併用し、分析、支援に活用できるよう考える研修を実践的に行った。	B
a15	b10		

ブロック内評価後の気付き	・「かかわり合いの中で主体的に学ぶ子の育成」をテーマに授業研究を進め、目指す子供像を共有することができた。、一定の成果が得られたが、今後も授業力向上を目指し、改善する必要がある。 ・校外活動等、たてわり活動など、体験的活動を取り入れ、活動が充実してきた。生活・総合的な学習の時間のみならず、道徳などでも単元開発し、地域の材などを生かす取組を進めることができた。児童のまちへの愛着や思いにもつながった。 ・クラスルームでの会議、ロイロノート活用研修、iPadを使った授業展開の工夫等ICT活用が飛躍的に進んだ。 ・基礎学力・あいさつなど、中学校ブロックや区内の共通認識・情報共有が密になり、同じ方向を見て進んでいる実感が増した。
学校関係者評価	・運動会や一本まつりなどの学校行事では、多くの方の参観のある中で開催でき、子どもたちが生き生きと活動する姿が見られたのよかった。夏祭りやもちつき大会等の地域行事への子どもたちの参加など、学校行事、地域行事の開催が、地域連携することにもつながるため、今後も続けていきたい。 ・ICT機器を使った授業も進められており、子どもたちもタブレット端末を使っての学習に慣れてきている。 ・本校の実態から課題を捉え、取り組んでいることを今後も継続したい。国際教室での外国につながる児童への支援体制が整えられたり、本校の子どもたちの体力が市平均に満たないものが多いという実態から体力向上の取組をしたりして、しっかりと取り組んでいる。

中期取組目標振り返り	・制限がされる前後の教育活動を再検討し、児童の実態を踏まえて学校行事や授業づくりに取り組むことで、子どもたちの資質・能力の向上につなげた。道徳の授業研究などの授業づくりの場面だけでなく、児童指導や特別支援など様々な場面でも、子どもたちを見とる視点を明確にして捉えることができた。 ・一本松小学校共育倶楽部の方による登下校の見守りや授業のサポート、一本まつりや野菜作りなどでの地域の方のサポートなど、地域の教育力を生かした教育活動を推進することで、子どもたちが安心して学ぶことのできる教育環境づくりにつなげることができた。

重点取組分野	令和 6 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
生きてはたらく知	・基礎・基本の定着と知識を活用する力の伸長を図り、主体的に学習に取り組む姿を育成する。 ・学び方の定着や話合いの焦点化を図り、自分の考えを根拠をもって伝え合い、よりよく解決していく姿と力を育成する。	・基礎基本の力は伸びてきた。それを関連付けたり活用したりする姿には至っていない。 ・根拠を持って自分の考えを伝える力が伸びてきた。協働の学び、話合いを通して自分の考えを広げる姿が多くあった。ただ、聞く力には課題が残り、話合いがつながっていく場面が少なかった。 ・ICTの活用場面を積極的に設定することで、児童の主体的な姿となって表れ学習の充実を図ることができた。	B
豊かな心	・よりよい人間関係の形成と、自他を大切にする態度を養うため、体験的な学習・活動、異学年交流の充実を図る。 ・自分づくりパスポートによる自分のめあての設定と振り返りを行うことを通して、自分づくりを促進する。 ・自分を律し、相手意識を大切にして、あたたかい学級・学校集団を目指し、道徳教育の充実を図る。	・たてわり活動や異学年交流で他者のとの関わりが増え、よりよい人間関係づくりや互いを思いやる態度を育てられた。 ・自分づくり」パスポートは内容や活用方法に課題が残る。 ・道徳を楽しむ児童が増えた。相手意識をもつことができ、あたたかい学級づくりにつながった。	B
健やかな体	・運動に取り組む機会や時間を確保し、体力の維持・増進を図る。 ・関係機関と連携した取組を継続し、運動やスポーツに対する関心を高め、運動やスポーツに親しむ態度を育成する。 ・学校保健委員会を中心に、心や体の健康についての取組の充実を図る。	ボール遊びの再開や学級及びたてわりでの長縄の実施により、体育以外でも体を動かす時間をつくることができた。学級ごとでも工夫して、ラジオ体操を取り入れたり、体育の時間に走る時間を取ったりしたことで運動量を増やすことができた。 行事や特別活動で、スポーツ選手や助産師の方から学ぶ機会を作ったことで、身体だけでなく、プライベートゾーンも含めた、こころの健康についても学び考えることができた。 今後も、学校全体での取組、学級ごとの工夫を生かして、運動に取り組む機会やこころの健康に関する取組の継続を図っていきたい。	B
公共心と社会参画	・公共物を大切にしたり、掃除を進んで行ったり、相手意識をもって行動できる力を育成する。 ・積極的にコミュニケーションを図ることを通して、自他の違いを共感的に理解し合う学級・学年・学校集団作りを推進する。	・勤労奉仕の精神で行動できる様子は多くはない。物を大切にしたり、環境を整えたりする意識や態度を育てていく必要がある。 ・コロナ禍を経て他者意識がやや薄らいできていたが、縦割り班活動や道徳、学級活動を通して相手意識や互いを認め合う素地を作ることができた。	B
いじめへの対応	・定期的に、また必要に応じていじめ防止対策委員会の開催をすることにより、広く情報を共有し、未然防止に努める。職員がいじめ防止基本方針を正確に把握できるようにする。 ・教師が迅速に、適切に対応ができるように実践的な研修の充実を図る。いじめをキャッチしたとき、すぐに必要な連携ができる環境づくりを行う。	いじめ対策委員会の形を今年度から変更した。全員参加をし、各担任が責任をもって議事録を記入することでより詳細に把握できるようになったと考えている。教職員一人ひとりの意識の高さによって、認知していくかどうかが左右されていくため、研修などを通してさらに意識を高めることが必要。	B
人材育成・組織運営(働き方)	・経験の浅い教員も自信をもって指導に当たることができるよう、学年研やメンター研、各種会議の時間を有効活用する。 ・一人ひとりがやる気をもって自分の役割を果たすことができる組織体制を固める。 ・会議・行事・日課表等の見直し・精選・改善を図り、持続可能な学校の在り方を検証し、質の高い学びの実現を図る。	・経験の浅い教員も機会と見通しと自信をもち、生き生きと業務に当たる姿が目立った。聞き合い、助言し合える雰囲気が生きている。 ・会議を精選しながら、質を維持しつつ、より質の高い学びを目指した。課題もあるが、今後も時間の確保と見通しにつながるように改善の視点をもつことも大切にしていく。	B
地域連携	・「一本まつり」などの学校行事や地域行事などを通して、地域の方と関わり合い、つながりを感じるとともに、感謝の思いを伝える。 ・社会科、生活科や総合的な学習の時間など、地域の人と関わる場面を設定し、自分もまちの一員であると感じ、自らまちに関わろうとすることができる。	学校行事や地域行事を通じて、地域の方々と関係性を深めたり、社会科や生活科の学習の中でかかわっていただいたことで自分たちが支えていただいていることに気付くことができた。一方、それが全学年で達成できたとは言い難い側面もあった。今後は、それぞれの取組を共有し深めていくことでさらに発展させていく必要があると感じた。	B
児童生徒指導	・校内組織の充実を図る。 ・月１回以上、全職員で児童情報共有を行う。 ・YPアンケートの実施、活用、横浜プログラムの活用を図る研修を行う。	校内組織として、特別支援教室と国際教室とで明確に役割分担が図られた。 月１回以上の情報共有の時間を有効的に使い、多くの教員が共通理解のもと児童に支援、対応できる環境づくりを行った。YPの活用を推進するための研修や実践は今後充実させていく必要があると感じた。	B
特別支援教育	・特別支援教室としての機能をもった教室を配置する。 ・個別支援学級と一般学級の児童が明確なねらいのもとに交流や共同学習に取り組む。 ・実践的な研修を行い、特別支援についての知識理解を深め、実践に生かす。	・特別支援教室を機能させることで、支援を必要とする児童の安心感や自信をもたせることができた。 ・初年度、個別支援学級の役割やねらいについて児童・教職員ともに特別支援研修としておこなった。 ・個別級の児童にとって交流級（共同学習）はどのような意味があるのか、教職員の研修が必要だと感じた。	B
国際教室	・国際教室を設置し、外国につながる児童の支援のため、通訳ボランティアなどとも連携を図る。 ・外国の言語や食べ物等を掲示して紹介し、全校児童の多文化共生の取組を推進する。 ・外国につながる児童一人ひとりの状況を的確に見取り、「特別の教育課程」を編成し、実施・評価・改善をしながら、様々な角度から日本語能力の向上を支援する。	・国際教室の設置により、外国につながる児童がより早く、安心して学校生活に慣れることができている。通訳ボランティア等との連携によって保護者との共通理解が図れるようになった。 ・掲示物だけでなく国際だよりを発行することにより多文化共生の意識を涵養することができた。 ・「特別な教育課程」に基づき、一人ひとりに応じた支援指導を行うことができた。	B

ブロック内評価後の気付き	・「基本的生活習慣を培い、地域とつながる～学力の向上と児童生徒指導の充実～」をテーマに掲げ、「主体的に学習に取り組み、学びを人生や社会に活かそうとする子ども」「心身の健康と思いやりの心を大切にし、礼儀を重んじる子ども」を目指し、子どもの成長を捉え歩みを進めることができた。中学校ブロックや区内の情報共有が密になり、横のつながりが強くなってきた。 ・取組の差はあるが、地域の材との連携での取組が増えてきた。 ・子ども会議でいじめをテーマに議論したことを、各校に戻って発信する機会を設けた。同じ視点で取組を推進できる機会となった。
学校関係者評価	・運動会や一本まつりなどの学校行事は、多くの方の参観のある中で開催でき、また、子どもたちが生き生きと表現したり活動したりしていてよかった。 ・すぐーるの活用が進んできた。タイムラインで学校の様子がリアルタイムで分かるようにする取組はとてもよい。 ・子どもたちがタブレット端末を使っての学習に慣れてきている。タブレットを使っていて漢字で書けなくなったなどにならないよう、ICTと鉛筆で書くことをバランスよく取り入れていくことが大切である。 ・国際教室の環境が整えられ、外国につながる児童への支援体制が整えられてきている。廊下に国々の挨拶の言葉や地図が掲示してあり、こういう国もあるんだなと興味をもつことができるようになっているのがとてもよい。

中期取組目標振り返り	・「かかわり合いの中で主体的に学ぶ子の育成」をテーマに授業研究を進め、目指す子供像を共有することができた。今後も授業力向上を目指し、よりよく改善していく必要がある。 ・校外活動、たてわり活動など、体験的活動を取り入れる取組が増えた。生活・総合的な学習の時間のみならず、道徳などでも単元開発し、地域の材などを生かすことができた。まちへの愛着や思いにもつながった。 ・外国につながる児童や特別な支援が必要な児童への支援体制が少しずつ整ってきた。目指す姿を明確に設定し、個々に応じた支援を続けていくことが大切である。 ・地域の教育力を生かした教育活動を推進し、児童が安心して学ぶことのできる教育環境づくりにつなげることができた。